

原田 郁

「わたしの空間」をひらく窓

—本日のゲストは原田郁さんです。さっそく自己紹介からお願いできますか。

原田：コンピューターの中にバーチャル世界を作り、その世界のなかの風景を絵画として描く、という作品を発表しています。2008 年末から始めて、もう 15 年ほどになります。このバーチャル世界のことは《inner space》と呼んでいて、それを温め、拡張しながらつくり続けています。

—こうした表現に進んだきっかけはあるのですか？

原田：美術大学で絵画を学んでいた 20 代半ばに、自分の絵の主題は何かという壁に突き当たったのですね。「私が描き続けたいものって何？」となったとき、生まれ育った山形県で、盆地に広がる田んぼの先に山並みが見える景色を思い出しました。それが私の原風景だったのです。進学して住み始めた東京は刺激的なものが乱立する世界で、興味も引かれたし目移りしたものの、どれもじっくりこないと感じていて。そこで私の生まれた場所に着目してみようと思いました。

子どものころは小学校の裏山から見下ろす風景や、山の上にある神社などをひたすら写生するのが好きでした。あの感覚を取り戻せたらと思ったとき、そうした風景を自分でつくってしまおうかという発想になったのです。当時、友だちが『どうぶつの森』というゲームをもっていて、それはあそぶ環境を自ら構築していくようなものでした。これだと思って、そうしたゲームの世界にヒントをもらい、描きたい場所をバーチャルで作ってみようと考えました。

そこから「SketchUp」というオープンソースの 3 次元モデリング・ソフトをさわり始め、現在に至ります。まずは盆地のような場所をつくり、そこにぼんやり見えてくる子どものころの風景や、積木のモニュメントをつくってみたのです。そうして地表を広げていくと、保存も拡張もできて、アーカイブにもなるし、面白い！と思いました。前例もなかったため、とりあえず 10 年やろうと決めました。そうして時の厚みをつくり、たしかな場所になっていったらいいなと思ったのです。

つまり、コンピューター上に自分の世界をつくり、それをキャンバスに描くところまで、同時に発想したのですね。

原田：そこは最初からセットで考えていました。「作品として成立するのだろうか」と思いつつ、「でも続けてみたい」という気持ちはすごくあったのです。以来、絵画も描きながらなのでゆっくりとですが、《inner space》は広がってきました。積木を使うのは、私自身が子どものころ遊んでいたことと、見立て遊びに最適なこと、そして木の温もりがあるように思うからです。実際に天然木の積木を買い込んで、着色して組んでみることもしました。そうすると箱庭のような感じで、やはりつくる楽しさがあり、どこか癒されもしました。

日常の積み重ねが育てるもの

一ちなみに、ふだんの原田さんの暮らしはどんなものなのでしょう。

原田：いまは作家業に加え、母親業が9年目です。制作以外では、1日のタイムスケジュールと献立のことをよく考えています。明確な切り替えはなく、結構シームレスで、無意識に細かくスイッチを入れ替えているのかと思います。たとえばパソコンをひらいて《inner space》を立ち上げると、その世界にアクセスして「さあ描くか」となる感じでしょうか。

一新作をつくるときは、《inner space》にも新しい要素を加えるのでしょうか。

原田：直にバーっとモデリングする感じではなく、紙に描くことも、パソコン上の別の環境でつくっておくこともあります。頭の片隅にある「気になる形」からモニューメントやオブジェをつくり、それが5年、10年越しで自分の感情や感覚と合致したとき「いける」とGOサインが出ることもあります。そこは慌しい日常のなかでも、感覚を研ぎ澄ませている部分です。

ですから無理にはつくり、つくれないうきは、ただ仮想世界を散歩するような感じで眺めるなどして、気づいたことは手帳やパソコンに書き込んだりもします。関連して生活のなかでも、例えばハプニングがあったときに「この感情は何色だな」とか、人と話していて「この人はこういうカラーも持っているのだな」とか、自分

の感覚的な記憶の仕方があって、それが制作時に突然やってくることもあります。

—原田さんの作品は色合いがビビッドで元気をもらえると同時に、とても静かな感覚があり、見ていると落ち着きます。

原田：先ほどお話した山形の風景は、冬になると真っ白な世界になります。私にはそれが白いキャンバスのように見えて、色を置いてあげたくなる気持ちもありました。また、これはうまくお話しするのが難しいのですが、父も絵を描いていて、ただし色弱なので色の扱いは得意ではないのですね。それでも学生時代から白黒の絵をずっと描いていたのです。私が物心ついたときには家じゅうに父の絵があり、私は絵って白黒のものだと思って育ったのですね。

それで自分も描こうとなったとき、最初は穏やかでふわふわした絵を描いていました。でも、これも20代半ばに突然、明解でメリハリのある色調で描き始めました。稲妻に打たれたように、自分がそれを欲している瞬間があったのだと思います。そして、色の力を信じたいという思いがあります。いまの作品も、絵画のほうは面で色を塗り込むような仕事で、たしかに絵の具の力はすごいのですね。塗り込むほどに驚くくらい主張してくる。まるで色が「見て！」と訴えてくる感じで、私も「いや～すごいね……」みたいな感じです（笑）。

—絵画作品の方は、やはり絵の具のテクスチャーなども豊かに感じられます。

原田：絵画らしさとしての質感や重さを与えたくて、光を拾うことや物質感など、モニター上にはないものを意識して描いています。じつは大学1年生のころはコンセプチュアルアートがやりたくなり、記号的なものや、「形」から感じる意味性など、ミニマルな対象に興味がありました。そこで学んできたことも、いまの表現に反映されていると思います。以前は、自分は複雑だな、どうしてストレートにできないのだろうと悩みもしました。でもいまは、割り切れなくてもいいし、それが面白いだと思っています。

私的な世界がひらかれていくとき

—今後も作品は変化していきそうでしょうか。

原田：これまでもかなり変化したというか、変化させてもらったというか。自分の内面に向き合うところからつくり始めたのですが、美術の世界だけでなく、ゲームが好きな人や、建築関係の方など、意外なところから見てくださる方も増えました。そうした方々がコミッションワークのお話をくださることや、私の仮想世界をアバターで動き回れる作品をつくってくれるということもありました。

そのたびに、自分のつくった世界に改めて新鮮な気持ちで向き合えるところがありました。そうして「私のインナースペース」が、気付いたら外にひらかれていたのは大きな変化だと思います。皆さんのアイデアも入り込んでくるのは興味深く、もう私だけの世界ではなくなってきているのかもしれませんが。それをNGとすべきか悩んだ時期もありましたが、日常でも多くの物事はひとりでは成立しないのだから、これも自然なことだなと流れに身を任せることにしました。そうすると可能性がまた広がり、新たにインスタレーションなどのアイデアも浮かぶようになりました。

時代の変化もあるのかもしれません。気づけば仮想世界がより身近な時代になり、「原田さんのやっていること、わかるよ」という理解者も増えたのは不思議ですね。そのうちVRグラスで《inner space》を散歩することなども、技術開発の側から声をかけてもらえたらチャレンジしてみようかなという感じです。基本的には、やはり絵を描きたい思いを中心に、《inner space》を広げていくのが目標です。

—そうした意味では、展覧会で各所を訪れる機会なども、制作に影響しますか？

原田：展覧会のテーマなどに沿って、《inner space》を拡張することもあります。知らない場所を訪れるのは遠足のようなワクワク感があり、インターネットで前調べをしたりします。例えばソウルで個展をした際は、そうした断片的な情報も使って、私のなかの「ネオソウル」のような空間をつくり、それをモチーフに描いてみました。

今回は「日常アップデート」展のコンセプトを伺って、自分の原点回帰だなと思いました。展示室の最初にある窓の絵画シリーズ「WINDOW」は、積木がいろいろ組んであるところに、よく見ると私のスタジオもあって、イーゼルやキャンバス、絵の具や木枠を組む前の材料があり、完成した絵もあります。描き疲れたら外に出て、

レジャーシートを広げたところにティーポットとドーナツが置いてあり……というふうには、この展示のためにちゃんと絵を描いていますよという感じです（笑）。

「誰かの居場所」としてのアート

—今回はワークショップ「共感の窓際」も開催していただきましたね。

原田：皆さんからも窓の絵を募集し、応募作品を《inner space》内のギャラリー空間に飾る試みです。ギャラリーは、インクルーシブをテーマにして円形の空間にしました。いま、約 200 名の参加者の方々の作品が、映像作品《inner space》のなかのギャラリーでご覧いただけるかたちになっています。

* 編注：原田郁ワークショップ「共感の窓際」（実施済）

参加者が描いたさまざまな窓の絵画を、原田による架空世界《inner space》内の新設ギャラリーにて、「日常アップデート」展の会期中限定で公開。

<https://inclusion-art.jp/archive/event/2024/20240615-260.html>

—「日常」においては誰もが何かしら悩んでしまうこともよくあるはずで、そうしたとき自分の居場所のようなものをつくれたら、なんとか前向きに進めるのではと考えていました。そこに原田さんの《inner space》が私のなかで合致して、ぜひ参加していただきたいと思ったのですね。

原田：それはすごく嬉しいです。

—今回の原田さんの絵画を展示したスペースに入ると、本当に落ち着きます。「みんなの仮想世界」になっているのではないかと思います。

原田：これらの作品は《inner space》へつながる「どこでも窓」みたいな存在だと思っています。絵を飾ることで、その壁に仮想世界の入口がいくつも生まれ、さまざまな場所からアクセスできたらと考えました。ちょっと疲れたときに、私だったらこの世界で何をするかと想像したり、一瞬でもリアルな空間から離れてリラックしたり……。そうして時間をかけて眺めて、ゆっくり自分自身に帰っていくような時間をすごしてもらえたらと思っています。

一色にパワーをもらってまた日常に戻る、というような過ごし方もありそうです。

原田：色って、同じ人でもその時々で、黄色が気になったり、ピンクに反応したりと、見え方も変わりますよね。私の作品では色はモデリング時に決めるのですが、たまにモノトーンで描くときもありますし、逆に変な色同士をぶつかけたりもします。この色とあの色は調和しないというセオリーから外れてもオッケーで、あえて楽しむというか。どこかで、何が隣り合っても調和は絶対に取れるはずだと思っているのです。

一ちなみに、仮装空間の中に人がいないのは、何か理由がありますか。

原田：私のなかの世界だから、というのが1番の理由です。当初は私のアバターみたいな子を入れていましたが、いま描いている「私」がこの世界とやりとりしながら描いているのだから、アバターはいらないと思ったのですね。積木で動物や乗り物のかたちをつくったものはありますが、それは純粹に子ども心に帰って「この背中に乗りたいな」というようなものをつくっています。

そして《inner space》のなかの存在の多くは、私の日記のようなものでもあります。言葉で書く日記とは違いますが、いろいろな形や色を、自分なりに消化したいのしょうね。人にはあまりはっきり言いたくない思い出なども含めて、形になって出てきているというか。だから「これ、なんですか？」と聞かれたら表立っての説明をしつつも、本当はこうなんですということもあります。

一そうした意味では、《inner space》は原田さんにとって、もうひとつの言語のようなものでもあるのしょうね。今日はとても興味深いお話をたくさん聞けました。ありがとうございました。